



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ブラキストンと札幌博物館
Author(s)	加藤, 克
Citation	北大植物園研究紀要, 5, 23-46
Issue Date	2005-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32880
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_p23-46.pdf



ブラキストンと札幌博物場

加藤 克¹

はじめに

北海道大学植物園博物館¹(以下北大植物園博物館と表記)に所蔵されるブラキストンの採集による鳥類標本について、筆者らはさまざまな側面から調査・報告を行ってきた。ブラキストンおよびその協力者であった福士成豊・プライヤーによる採集・標本管理状況から、それらの標本が開拓使の函館博物場に寄贈され、のち現在の北大植物園博物館に移管されるまでの経緯についての報告(加藤・市川 2002、以下旧稿と表記)やブラキストンが標本を開拓使東京出張所に貸し出し、その標本を模写した鳥類図が東京仮博物場によって制作されており、その鳥類図も現在北大植物園博物館に所蔵されていることについての報告(加藤 2003、田島 2003)などが主なものである。ここにみるように、ブラキストンの鳥類標本について検討するにあたっては、常に「開拓使の博物館」の姿が現れてくる。ブラキストン自身は他のお雇い外国人のように開拓使に雇われていたわけではないが、その測候技術を開拓使の職員であった福士に教示し、その機材も提供したこと、福士の協力を得て鳥類標本を採集していたことなどから、上記のような深い関係が成立したものと考えられる。

さて、開拓使の博物館は上述した函館・東京だけではなく、開拓使本庁のあった札幌にも存在していた。北大植物園博物館の前身にあたる札幌博物場である。これまで、ブラキストンと札幌博物場の関係については、犬飼(1932)によるブラキストン伝の中で、1882年の札幌博物場の新営にあたって、函館博物場に寄贈されたブラキストンの標本が一部札幌に移管されたと記述されたことがある。しかし、この件については別稿(加藤・市川 2005)で指摘したように、犬飼の記述の根拠となる資料の検討の結果、移管の打診とブラキストンの承諾はあったものの、函館からの反対および開拓使の廃止などの影響で、標本の移管そのものは実現しなかったと考えられた。犬飼の指摘は札幌博物場とブラキストンの関係が必ずしも希薄なものではなかったということを示唆するものではあるが、これまでに知られている函館・東京の博物場と同じ程度に交流があったというには材料に乏しい。

本稿では、これまで触れられることのなかったいくつかの資史料、標本を用いながら、ブラキストンと札幌博物場との関係について検討することとする。構成としては、まずブラキストンが日本に滞在していた時期にかかわった各博物場・博物館の状況、特に各館の鳥類標本の実態について確認し、当時札幌博物場がおかれていた状況について比較検討する。ついで、従来紹介されてこなかったブラキストンと札幌博物場の関係を示す史料・標本について紹介し、そのあり方を再検討することとしたい。

1. ブラキストンと明治期の博物場

本章では、ブラキストンがかかわった博物館施設の様子について確認しておきたい。対象は、ブラキストンとプライヤーが日本の鳥目録である『Birds of Japan』²(1878, 1880, 1882、以下『BJ』と略し、刊行年次を併記する)を著すにあたって利用した函館博物場³、東京仮博物場、札幌博物場(以上開拓使所管)、札幌農学校所属標本室、国立博物館(山下博覧会、山下博物館：内務省)、教育博物館(文部省)といった日本国内の各施設である。以下、これらの施設について、①各施設の設立からブラキストンが日本に滞在していた時期の概要(1870年～1883年頃)、②ブラキストンが利用した各施設の鳥類標本の状況を確認し、その上で各施設の鳥類標本収集・管理体制について判明する範囲で整理することとしたい。

¹ 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園博物館

1-1. 函館博物館⁴

函館博物館は、1879年5月に設立された開拓使の博物館である。函館では、1872年に天神社内柳川でウィーン万国博覧会に出品予定の収集資料を公開する展覧会が開催されているが、常設の博物館としての計画が立ち上がったのは、1878年のことである。この博物館の目的とするところは、「本使管内ヨリ産出スル物産ヲ第壹トシ御國內自然ノ物産ト人工製造諸物トヲ収集シ一般人民ノ縦覧ニ供セハ即チ開拓ノ進歩ヲ補助シ(中略)、中外博覧会ノ挙アルニ際シ出品ノ順序ヲ整調スルノ便を得(中略)、当港ノ如キ内外人民輻輳ノ地ニ於ハ自然要用ノモノ⁵」とあるように、開拓を進めるための広報としての役割、このころ盛んに開催された内外の博覧会への出品体勢の整備などであるが、特に開港場である函館にとって必要な施設であるという認識があったようである。これらの認識は後述する開拓使の博物館においても共通であった。

函館博物館の設立にあたっては、矢田部良吉、モースに指導を仰いだことが知られているが、展示・収蔵する標本にとって最も大きな存在はブラキストンであった。ブラキストンは1863(文久3)年から函館に滞在し、富士やプライヤーの協力の下、日本産鳥類標本を収集し、研究を継続していた。その標本が1879年の函館博物館の開設にあたって寄贈されたのである⁶。ブラキストンの標本を含めた、函館博物館の鳥類標本の状況を確認することとしたい。函館博物館には、1880年段階で1,370点⁷、2年後の1882年段階で1,376点⁸の鳥類標本が所蔵されていたという記録がある。ブラキストンは1879年に1,314点(300種超)の鳥類標本を寄贈した際に、「富士氏或ハ拙者兩名之内、當道ニ在留中ハ右鳥類修正方或ハ交換等可致権力⁹」という条件をつけている。これに伴い、寄贈以降に採集された鳥類標本も函館博物館に追加して寄贈され、時にはブラキストンの手元に戻ったものもあると考えられるが、最終的な寄贈点数は、『開拓使事業報告』にみる寄贈点数1,338点という記述を信頼して、1,330点を超える程度であったと旧稿では判断した。このようにしてみると、函館博物館の鳥類標本は、ブラキストンの標本が大部分を占め、独自で収集したものは限られた点数しか所蔵していなかったようである。実際1881年末に、ブラキストン標本を札幌へ移管しようとする開拓使の動きに対して、函館側からの請願書にある「該鳥類(ブラキストン標本のこと：引用者注)ヲ館外ニ出スニ於テハ他ノ鑛石木材魚介獸類ノ数種ニト雖モ未タ蒐集ノ日浅シテ、陳列セルモノ僅々一類二三ニ過ギズ、最モ陳列ニ多数ヲ得タル鳥類剥製ヲ除カハ、假令博物館ノ名アルモ寥々」¹⁰という記載から、他の標本を含めても、ブラキストン標本の占める割合が如何に大きかったかがわかる。

ブラキストンの記した函館博物館の鳥類標本の状況についても確認しておきたい。ブラキストンは、1880年段階で日本産鳥類を325種とし、うち254種が函館博物館に所蔵されていると記している(『BJ』1880)。これに対して、1882年段階では日本産鳥類を359種、うち278種が函館博物館に所蔵されているとする(『BJ』1882)。上述したように、この2年間の間に函館博物館の鳥類標本点数の増加は6点にとどまっているのに対し、ブラキストンの記すところの博物館所蔵種数が24種も増えている。上述した博物館の所蔵標本点数を信頼した場合、種数の大幅な増加と標本数の微増との間に存在する矛盾について検討する必要があるだろう。

可能性の一として、ブラキストンがすでに函館博物館に納められていた自身の標本を再同定し、種を分けた可能性もあるが、現存するブラキストン寄贈標本のうち、採集日が明らかになるもので最初の標本寄贈後の1881年から翌82年末までに採集された標本が100点を超えること、および上述したブラキストンの標本寄贈時の条件を考えるならば、ブラキストンが新たに収集した種の標本を納め、かつ一部の標本を引き取った結果、種数は増加したものの、標本点数はそれほど増加しなかったと考えることができる。可能性の二として、ブラキストンが標本を出し入れした結果、標本点数が増加していたにもかかわらず、函館博物館のスタッフがその増減の状況について把握できておらず、函館博物館独自で収集した6点のみを記録したと考えることもできる¹¹。旧稿でブラキストンの標本寄贈点数の混乱について整理したように、ブラキストンが寄贈した標本点数については、当初の寄贈点数と考えられる1,314点と最終的、あるいはある時点(1880年頃)の寄贈点数1,338点という二説が混乱して利用されてきている。後者の数字は、二次資料である『開拓使事業報告』に基づくもので、誤りである可能性が指摘されてきたが、現存する標本の採集年次などから後者もある時期の寄贈点数を示しているものと考えられ、ブラキストンの寄贈標本点数は、当初の1,314点より増加しているものと考えられた。しかしながら、1884年の時点で函館博物館のスタッフの責任者であった渡辺章

三が行った標本点数調べでは 1,314 点という標本点数が確認されていること、1890 年の標本数調査の時点でもブラキストンの標本点数が 1,314 点であると記述されており、函館博物館としてはブラキストン標本を当初の点数のまま所蔵していると考えていた形跡があるためである。

これらの標本点数の混乱について、旧稿以降に確認した情報を付け加えつつ、再検討することとしたい。

従来利用されてきたブラキストンの標本寄贈点数および関連する情報は以下のものである。

1879 年	函館博物館開設時：1,314 点
1880 年	『開拓使事業報告』：1,338 点
1880 年以降	採集・寄贈の標本点数：100 点超
1880 年以降	ブラキストンが入れ替えた標本点数：不明
1884 年頃	函館博物館標本管理点数 ¹² ：1,314 点から 4 羽半不足(標本のうち、首 4、足 3 を半分として計算、なお保有数の 1,309 点と半分には「ブラキストンへかしの分 7 点」も含まれる)
1890 年頃	函館博物館標本管理点数：1,314 点 ¹³
1932 年頃	北大植物園博物館に移管されたとされる点数：1,331 点 ¹⁴

従来、ブラキストンが標本を函館博物館に寄贈したのは、欧米の博物館に送る際に海難事故で標本を失うことを恐れたためであるとして、その全ての標本が函館に寄贈されたと考えられてきた。このため函館博物館寄贈以前の標本の移管先についての記述はあるが、寄贈以降の標本や寄贈されなかった標本については特に注意を払われることはなかった。筆者もこの前提に基づき、ブラキストンが寄贈後に標本を入れ替えたとしても、一時的な研究材料として利用したにとどまり、最終的な寄贈点数は『開拓使事業報告』に見る 1,338 点から増加することこそあれ、大幅な減少はないものと考えてきた。しかし、ブラキストンが帰国後に『BJ』1882 を補記した目録(Blakiston 1884)の *Corvus neglectus*¹⁵ の項に「specimen previously referred to as in the Hakodate Museum, which I have brought to England」とあり、また *Bubo blakiston*¹⁶ の項には「Very fortunately among the specimens I exchanged with the Hakodate Museum on leaving Japan (the collection of bird-skins there amounts to over thirteen hundred, presented by Mr. N. Fukushima and myself) I secured the only example of what I had never doubted was *B. maximus=ignavus*。」という記述がある。また、スタイネガーの一連の報告(Stejneger 1886a)によれば、日本を離れアメリカに向かったブラキストンから、1884 年に彼の標本(「Magnificent collection」)がノート、目録とともに United States National Museum¹⁷(以下 USNM)に寄贈されていたことがわかる。このことから、少なくとも最終的に、ブラキストンが自らの標本を全て日本に残すことが安全で意義があると考えていたわけではないということが判明する。

スタイネガーの日本の鳥類に関する報告(Stejneger 1886a ほか)に現れる、ブラキストンが情報提供を行った標本点数は 131 点¹⁸になる。うち USNM に寄贈された標本は 72 点、函館博物館にあるとされる標本は 24 点、その他はブラキストンのノートの記述のみを引用しているもの¹⁹、あるいはブラキストンが函館博物館寄贈以前に送っていた先であるスウィンホーないしシーボームのもとにあるとされるものである。

まず、アメリカに渡ったブラキストン標本の内容について検討してみたい。これらの標本の採集時期は、ブラキストンが函館博物館に最初に標本を寄贈した 1879 年以前のものとして以降のものとはほぼ同数である。ブラキストンの標本番号は採集年代順にほぼ並んでおり、スタイネガーの記したリストの標本番号から、採集年代のわからないものも多くは、1879 年以前の採集標本であると推察される。仮にブラキストンが所有していた全ての標本を、1879 年に一旦函館博物館に寄贈したとするならば、USNM に寄贈したコレクションは一時的にせよ函館博物館に所蔵されていたものであることになる²⁰。

さらに、スタイネガーの報告から新たに確認される点がある。函館博物館に所蔵される標本については函館博物館の管理番号が記載されている。この番号が示すものを現存標本から検索したところ、旧稿で「ラベル 4」とした現存標

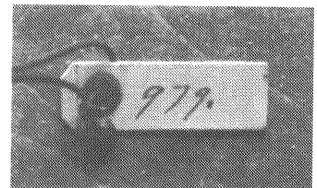


写真 1 「ラベル 4」

表. Stejnegerの報告に見るブラキストン標本と現存標本の比較

Stejneger											北大植物園博物館標本			
BL. No.	Hakodate No.	種名	採集地	採集日	BL. No.	ラベル4記載	種名	採集地	採集日	現行標本No.				
1	1110	キバシリ	函館	1873年 2月 1日	1110	179	キバシリ	函館	年 2月 日	3149				
2	1112	キバシリ	函館	1873年 3月24日	1112	180	キバシリ	函館	年 3月 日	3150				
3	2387	181	札幌	1877年 5月 6日				該当なし						
4	2388	182	札幌	1877年 5月 8日	2388	182	キバシリ	札幌	1877年 5月 8日	3151				
5	2559	183	札幌	1879年 4月 日	2559	183	キバシリ	札幌	1878年 4月 7日	3147				
6	2785	222	札幌	1881年11月 3日	2785	222	キバシリ	札幌	年11月 日	3148				
7	2164	295	函館	1877年 2月12日	2163	295	シマエナガ	函館	1877年 2月12日	3269				
8	2165	296	函館	1877年 2月12日	2165	296	シマエナガ	函館	1877年 2月12日	3272				
9	2380	299	札幌	1877年 5月 5日	2380	299	シマエナガ	札幌	1877年 5月 5日	3270				
10	2381	300	札幌	1877年 4月21日	2381	300	シマエナガ	札幌	1877年 4月21日	3267				
11	2163	なし	函館	1877年 2月12日	2163	295	シマエナガ	函館	1877年 2月12日	3269				
12	2905	429	エゾオオアカゲラ	1882年10月12日	2905	429	エゾオオアカゲラ	札幌	1882年 6月 4日	3643				
13	754	748	エゾオオアカゲラ	1861年10月21日	記載なし	748	エゾオオアカゲラ	函館	年10月 日	3638				
14	1608	749	エゾオオアカゲラ	1874年11月10日	1608	749	エゾオオアカゲラ	千歳	1874年11月10日	3638				
15	1611	750	エゾオオアカゲラ	1874年 8月25日	1611	750	エゾオオアカゲラ	■村	1874年 8月25日	3641				
16	2338	751	エゾオオアカゲラ	1877年 4月21日	2338	751	エゾオオアカゲラ	札幌	1877年 4月21日	3640				
17	2344	754	コアカゲラ	年 4月 日	2344	754	コアカゲラ	札幌	1877年 4月29日	3669				
18	2765	755	コゲラ	1879年 6月23日	2765	755	コゲラ	札幌	1879年 6月23日	3667				
19	1010	1053	ダイサギ		1010	1052	ダイサギ	函館		4248				
20	2255	1053	ダイサギ	1877年 5月 2日	2255	1053	ダイサギ	函館	1877年 5月 2日	39024				
21	2521	1054	ダイサギ	年 4月 日	2521	1054	ダイサギ	函館	年 4月 日	4247				
22	1426	1059	サンカノゴイ	1874年 4月 6日	1426	1059	サンカノゴイ	函館有川村	1874年 4月 6日	4252				
23	2904	1250	エゾオオアカゲラ	1882年 6月 2日	2904	1250	エゾオオアカゲラ	札幌	1882年 6月 2日	3642				
24	2877	188?	エゾオオアカゲラ	1881年11月27日	2887	188	エゾオオアカゲラ	札幌	1881年11月27日	3644				

BL. No.は、スタイナーの報告に見るものと、旧稿でブラキストンの管理番号とした番号を比較している。
下線部は、情報の混乱が見られる部分。3例目のキバシリは、現在確認することができない。13例目のエゾオオアカゲラのブラキストン番号は、これまでに判明したブラキストン番号の範囲に入らないが、付属する金属プレートに記載されている番号がそれに該当する可能性が高い。しかし、これには「757」のプレートが付属していることが問題である。19例目のHakodate No. は20例目に「1053」があるので、誤記と考えられる。

BL. No.は、スタイナーの報告に見るものと、旧稿でブラキストンの管理番号とした番号と比較している。
 下線部は、情報の混乱が見られる部分。3例目のキバシリは、現在確認することができない。13例目のエゾオオアマガのブラキストン番号は、これまでに判明したブラキストン番号の範囲に入らないが、付属する金属プレートに記載されている番号がそれに該当する可能性が高い。しかし、これには「757」のプレートが付属していることが問題である。19例目のHakodate No.は20例目に「1053」があるので、誤記と考えられる。

本付属のラベルに記載されている番号と種、採集データが表のように合致し、この「ラベル 4」の番号こそがスタイネガー、つまりブラキストンの函館博物館の管理番号であることが明らかとなるのである。

旧稿では、このラベルは函館博物館がブラキストン離日後の 1884 年ないし 1890 年の標本数調査時に当初の寄贈点数である 1,314 点を確認するために付与したラベルであり、実態を示していない可能性があるとしたが、スタイネガーがブラキストンのノートを用いてこの番号を記述していることから、この「ラベル 4」はブラキストンの滞在中に、函館博物館が管理番号として付与したものであり、この管理体制についてはブラキストン自身も関与していたと見るほかなく、旧稿での「実態を示していない」という見解は修正されなければならない。

ここから、確認される事項は以下のものである。ラベルの残存状況から、この「ラベル 4」は 1 から 1,314 までの番号が記載されたラベルであり、1,315 以降の番号を持つラベルは存在しないと考えられる。次に、このラベルが付属する標本は、1879 年の最初の寄贈標本だけではなく、1880 年以降採集の標本にも付属していること、およびブラキストンは学術的な標本管理を寄贈の条件としており、離日後もこのラベルの番号を学術情報として用いていることから、ブラキストンが最終的に函館博物館に残した標本全てにこのラベルが付与されたと見るべきである。現存するブラキストン標本の大部分を占める 1,221 点²¹にはこの「ラベル 4」ないしその紐が付属していること、この他に現在「ラベル 4」は確認できないものの、1932 年の犬飼・山階らによる調査の時点では付属していたと考えられるものがある²²こともこれを裏付ける。以上の点から、ブラキストンが最終的に函館に残した標本数は 1,314 点であるといえる。この「1,314」という点数はブラキストンが当初寄贈した点数と合致するが、すでに述べたように当初寄贈以外の標本が 100 点を超えており、ブラキストンは当初寄贈以降に納めた標本数と同数の標本を手元に戻したことになるのである。さらに、1884 年の段階での「ブラキストンへかし(貸し)の分」7 点が返却されず、所在不明の 4 点半が発見されていなければ、函館博物館のブラキストン標本点数は「1,302 点半」となる。

以上の結果、当初寄贈された 1,314 点以降に採集された標本が 100 点以上含まれているにもかかわらず、ブラキストン離日後の標本点数も 1,314 点として扱われていることについては、最終的に寄贈された標本点数も 1,314 点であったことによるもので、同じ「1,314 点」であっても厳密には含まれる標本の構成が異なっていることを考慮に入れた上で、矛盾は生じないことになった。しかしながら、この標本点数は最終的な寄贈点数であり、その間の数年間の標本数の増減については明らかとしてくれるわけではない。『BJ』1880 および 1882 にみる所蔵種数の増加から、1879 年の当初寄贈と 1883 年の帰国時の最終的な寄贈・整理だけがブラキストンによる標本の追加・交換ではなかったことは明らかであるし、『開拓使事業報告』の 1,338 点という記述を信頼するならば、一時的にせよ寄贈標本数は増加していたことになるにもかかわらず、函館博物館の 6 点のみの増加という記録についてはいまだ解決できていない。上述した可能性の二である函館博物館のスタッフの関与の状況についても検討する必要がある。

鳥類標本という分野に限ってではあるが、上述したように函館博物館の標本数の増加はほとんど見られない。千代(1979)によれば、1872 年にウィーン万国博覧会事務局から鳥獣類剥製法が伝えられていたことから、剥製類は函館で作製できたという。たしかに、現在市立函館博物館に収蔵されている動物・魚類標本類は、明治 10 年代に函館で作製されたものであり、独自の収集体制を持っていたことは間違いない。しかし、函館博物館の鳥類標本について、ブラキストンの標本以外に知るところは少ないのも事実である²³。

函館博物館のスタッフは、開場時には御用掛渡辺章三をはじめ、看守・技術生など 13 名の職員が配置されていた²⁴が、後には看守長・看守・小使という体制となり、看守長および看守には学識経験者が選ばれていたという(千代 1879)。初代看守長となった渡辺は、1875 年樺太・千島交換条約締結後の総合調査で、地質物産担当の助手を務め、1878 年に標本採集のため函館に訪れたモースや矢田部良吉に同行し、博物学、陳列方法などについて学んだ後、函館博物館の要職を務め続けた人物である。それでは、渡辺を中心として、鳥類標本の充実が図られていたのだろうか。渡辺の経歴、実績から見てもその能力は評価できる。ブラキストン標本に混入して函館から北大植物園博物館に移管された鳥類標本の中に、4 点「渡辺」の名前のある標本²⁵が含まれており、鳥類採集を行っていたことも確認される。また、上述したように 1884 年時点でのブラキストン標本の点数調査を行ったのも渡辺である。しかし、「看守」という役職に求められた職務は「函館仮博物館看守内則」²⁶によれば、清掃および監視というものであり、ブラキストンが函館で

行っていたような体系的な収集・管理活動を行っていたかどうかは疑問がある。1890年に作成された「函館博物場陳列品目録」にはブラキストン寄贈の標本点数が1,314羽という記述があるが、その後段に「ブラキストン氏献品鳥類千三百拾四種ト見ナシ」とあるように、所蔵するブラキストン標本の全容を把握できていなかったようであるし、渡辺が調査を行った際の「ブラキストンへかしの分」7点、所在不明の4点半がどうなったかについての記述もない。さらにいうならば、この「函館博物場陳列品目録」にはブラキストン寄贈以外の鳥類標本が35点ほど記載されているが、この情報の精度についても疑問がある。函館博物場から分散したブラキストン標本に含まれていた函館博物場由来の鳥類標本の中に、以下の情報を持つ標本が存在する。

- ・標本番号 3045 コクマルガラス：明治十一年六月九日、亀田郡亀田村
- ・標本番号 3614 ツツドリ：十九年九月廿七日、亀田郡亀田村、長崎護通献
- ・標本番号 4161 オオバン：十九年八月五日、亀田郡中川村函館区地蔵町十四番地、高島精一献
- ・標本番号 4286 ノスリ：明治十九年二月、函館、勸業課、長崎献

これらは、「函館博物場陳列品目録」の作成以前に収集されたものであり、特にノスリにおいては「勸業課」とあることからまず間違いなく函館博物場に納められたと考えられる標本である²⁷。しかしながら、これら4点については「函館博物場陳列品目録」には記載されていない。実際に函館博物場に納められていたはずの標本が目録に掲載されない理由はどこにあるのだろうか。①ブラキストン標本のなかに混入して管理されていた、②情報の管理が徹底できていなかった、などが理由として考えられる。ブラキストンの滞在中は、標本棚の作成から展示の配列までブラキストンが行っており、博物場独自の管理体制の構築が遅れていた可能性が高く、標本付属のラベルや標本管理簿からは、ブラキストンが行っていたような標本番号による管理が行われていた形跡はない。これらの管理体制を現在の我々の基準から評価することは慎むべきであるが、ブラキストンが寄贈の条件とした「現状維持および学術的利用に供するための管理」とは隔たりがあったということはできるのではないだろうか。

このような管理体制であったため、①1880年および1882年の段階で、函館博物場はブラキストン寄贈標本点数の増加について把握できていなかった。②所蔵標本の全ての管理が行き届かず「函館博物場陳列品目録」から上記の標本が欠落した。③1884年の渡辺の調査は正確なものであったと考えられるが、それ以降においてはブラキストン標本の全容についての調査・管理が行われておらず、1890年の調査の時点では「1,314点」という従来の情報の引き写しをしていた可能性がある。ここに、『BJ』の所蔵種数の増加と、函館博物場の標本点数の微増という矛盾があったのではないかと考えられるのである。

ブラキストンが札幌博物場からの移管申請に際して同じ管理条件を出したことも、帰国に際して自身の標本に「ラベル4」を付与していったことも、期待する標本管理が函館博物場で十分に行い得ていなかったためではないかと推測されるし、帰国にあたって、当初寄贈点数は守った上で、自らの必要とする標本を持ち帰ったのも、自身の研究のためという理由もあったであろうが、より有効に利用される場所に標本を保管することを意図したのではないかと推測されるのである。

煩雑な考証及び推測を繰り返した嫌いがあるが、函館博物場の鳥類標本および管理体制は以上のようなものであったと考えられる。

1-2. 東京仮博物場²⁸

次に、開拓使東京出張所に併設されていた東京仮博物場について確認することとしたい。東京仮博物場は、1875年に東京芝公園内の開拓使東京出張所構内にあった仮学校が札幌に移転された跡地に設置された北海道物産縦観所を前身とする、開拓使による最初の博物場である。設置の目的は「北海道ノ物産及開拓ノ参考ニ供スヘキ内外ノ物品ヲ展列シ衆庶ニ縦覧セシム」²⁹とされる。翌年2月に東京仮博物場と改称され、「北海道産物ノ義ハ、広ク衆人ノ見聞ニ触レサル者有之候ニ付、専ラ該道動植鉱物ノ類其他有益物品ヲ蒐集シ、傍各国ノ物品ヲモ取交ヘ参考ノ為メ(中略)陳列」する場として位置づけられた。この目的を達成するために、職員として鳥獣剥製製造人や画工らを配置し、質の高い陳列活動を行おうとしていたとみられる。

東京仮博物館の鳥類標本は、『開拓使事業報告』によれば 1875 年段階で鷹 1、鷲 11、鳥類剥製 55 の 67 点であった。ブラキストンとプライヤーは『BJ』1878 でこの博物館に「アカゲラ、ワタリガラス、ギンザンマシコ、アオバズク、オジロワシ」の 5 種(記載 313 種中)があると記載している。その後、『BJ』1880 では 8 種(記載 325 種中)、『BJ』1882 では 33 種(記載 359 種中、ただし Sapporo College Collection としての扱い)と徐々に鳥類標本を収集していたことがうかがえる。

東京仮博物館の職員体制は 1877 年の段階で 17 名が確認され、この中に鳥獣剥製製造人として「村田庄次郎(莊次郎)」の名前が確認される。村田は後に札幌農学校の職員として博物館で勤務する人物である。出身は静岡³⁰であり、東京出張所勤務期に北海道の鳥類に明るかったかどうかは定かではないが、のちに「北海道鳥類一斑³¹」を著すのを始め、明治中～末期における北大植物園博物館の鳥類標本の大部分を収集していること、また標本管理も行っていたことから、東京仮博物館における鳥類標本の管理も村田の手によって行われていたと推測されるものの、詳細は明らかとはならない。

この東京仮博物館は、1881 年開拓使東京出張所が廃止となるに伴い閉鎖され、その資料は札幌、函館の博物館、札幌農学校、また東京の国立博物館などに分散されることになった。ブラキストンは東京仮博物館を「the Museum of the "Kaitakushi"(Departomant for Agriculture)」(『BJ』1878)、「the Kai-taku-shi at Shiba」(『BJ』1880)、「the 'Kaitakushi' Shiba collection to Sapporo college」(『BJ』1882)と記しており、東京仮博物館の鳥類標本は廃止後札幌農学校へと移管されたことがわかる。

ブラキストン・プライヤーと東京仮博物館の関係は彼らの目録作成の調査だけではとどまらない。1877 年ごろ、東京仮博物館は北海道産の鳥類図を展示するために、その模写のモデルとしてブラキストンの標本 200 点ほどを借用して、画工牧野数江が中心となって鳥類図 150 点あまりを制作した。標本の貸出にあたっては、ブラキストンから直接東京仮博物館に送られたのではなく、横浜に住んでいたプライヤーが仲介に立っていたことがブラキストンやプライヤーの書簡から知られる(加藤 2003、田島 2003)。ブラキストンからの積極的な働きかけというものではないが、函館博物館に標本が寄贈される前から、ブラキストンの手元に多くの標本が保管されていることを開拓使が把握していたことを物語る事例である。

1-3. 教育博物館³²

ブラキストンが「Kiyoiuku Hakubutsukan" of the "Mombusho" (Education Department)(『BJ』1878)、「the Keu-iku Haku-butsu-kuwan of the Mon-bu-shiyau」(『BJ』1880)、「Education Museum at Tokyo」(『BJ』1882)と呼んだ教育博物館は、1870 年の大学南校物産局を起源とし、1871 年の文部省設置後に博物局へと引き継がれた文部省博物館の 1877 年ごろの名称である。

文部省博物館は 1873 年 3 月に太政官正院に置かれていたウィーン万国博覧会事務局に吸収され、11 月には内務省の設置に伴い博覧会事務局ごと内務省の所管となった。しかし、もともと「教育博物館」としての役割を目指していた文部省博物館にとっては、殖産興業を目的とする博覧会事務局の中での位置づけに満足できず、1875 年 2 月に旧文部省所属の博物館、書籍館、小石川薬園が内務省から文部省所管へと戻ることとなった。その際、大学南校の頃から収集していた標本類は内務省の博物館へと引き渡され、新たな博物館の標本・資料は改めて収集し直すことになったものである。分離した博物館は、内務省に残った博物館が「博物館」という名称を用いたため、「東京博物館」と称し、1877 年には上野公園に場所を移し、「教育博物館」と呼ばれることになった。これが、現在の国立科学博物館の起源である。

内務省の博物館に標本類を提供した教育博物館が所蔵する鳥類標本は、1875 年段階でわずか 15 点に過ぎず、収集の促進を図るため、横浜の商社に勤務していたプライヤーを雇うことになった。プライヤーは 1876 年 7 月から 10 月まで奈良、高知へとおもむき標本を収集し、また分類同定にあたった。1876 年時点では所蔵鳥類標本が 395 点へと増加し、プライヤーの力がどれほど大きかったかが想像できる。これまでに見たように、ブラキストンの記述からも教育博物館の鳥類標本の状況について見てみると、『BJ』1878 で 4 種(記載 313 種中)、『BJ』1880 で 8 種(記載 325 種

中)、『BJ』1882で24種(記載359種中)というように順調に種数が増加しているが、上述したプライヤーの採集標本の増加が反映されていないように見える。これについては、ブラキストンの鳥類目録では「Tokyo Museums」に相当数の種(『BJ』1882で172種)が所蔵されているとされ、開拓使の東京仮博物場の標本が札幌農学校へ移管された後にも「Tokyo Museums」という表記がなされていることを考えると、後述する内務省の博物館とあわせて記載されたものと思しく、教育博物館には上記の種数にとどまらない鳥類標本が所蔵されていたものと考えられる。同館の1881年時点での鳥類標本所蔵数は1404点、内容としては、トビ、ミミズク、フクロウ、アカゲラ、ホトトギス、カッコウ、スマトラ島産鳥類、モズ、アカモズ、ツグミ、ウグイス、キクイタダキ、ミソサザイ、ヒバリ、シメ、イスカ、キレンジャク、ヒレンジャク、ミヤマカケス、ヨタカ、アオバト、シラコバト、キジバト、ウズラ、ライチョウ、ヤマドリ、キジ、ダチョウ、オオバン、欧州南部産のバン的一种、タゲリ、ミヤコドリ、タシギ、ゴイサギ、アマサギの類、ヘラサギ、トキ、クロトキ、ダイサギ、ハクチョウ、アメリカ産ハクチョウの骨格、ヒシクイ、マガン、マガモ、オシドリ、カワアイサ、ペリカン、アホウドリ、カイツムリ、家畜鳥類などが記録に残っていることから、まず間違いない³³。

教育博物館はプライヤーの辞任後も、波江元吉³⁴をはじめとする動物学分野スタッフが各地へ採集旅行におもむき標本の充実を図っていた。さらに、この博物館はスタッフによる収集にとどまらず、国内外の博物館との資料交換を行っていたため、上述の国外鳥類の標本を入手することができた。Stejneger (1886d, 1887c)によれば、1886年より少し前に、USNMは東京教育博物館から琉球で採集された「fine collection」を受け取っている。同時に、スタイネガーに同定を依頼する目的で、波江が別の標本群を送っていることがわかる。その後も「Tasaki」、「Nishi」という採集者によって採集された琉球の標本、1887年に波江が伊豆諸島で採集した標本など、続々とUSNMに送られ、スタイネガーによって同定・記載されている(Stejneger 1886d ほか)。ここで注目しておくべきことは、アメリカ産の鳥類標本を交換で入手するためだけに標本を送っているのではなく、教育博物館の標本としての地位を確保した上で、同定してもらうために送っている標本が多数含まれていたという点である。自らのコレクションをより体系的にするために、外部に協力を求めるという姿勢は、「陳列場」としての役割を目的としていた開拓使の博物場には見られない特徴である。

ブラキストンと教育博物館の関係はあまり知るところがないが、スタイネガーの報告ではブラキストンのノートに記述される教育博物館の標本が言及されていること、ブラキストンと波江の間で情報交換が行われていたことを伝える書簡が存在すること³⁵、この書簡とともに波江の手元にあったブラキストンの報告に、ブラキストン自筆の校正が加えられていること(加藤・市川 2005)、現在国立国会図書館に所蔵されているブラキストンの報告(Blakiston 1884)の表紙には、「東京教育博物館印」が押され、「明治十七年四月九日納付 プレキストン氏」という記述もあることから、活発な交流があったことをうかがわせる。

1-4. 国立博物館(山下博覧会、山下博物館)³⁶

ブラキストン・プライヤーが「Yamashita Hakurankai」 of the "Naimusho"(Home Department)(『BJ』1878)、「the Yamashita Haku-butsu-kuwan」 of the Nai-mu-shiyau(『BJ』1880)、「the 'Yama-shita Hakubutsu-kwan' has been removed to the new building of the National Museum in Ueno Park, Tokio」(『BJ』1882)と呼ぶ博物館は、現在の東京国立博物館にあたる博物館である。この博物館は、1872年3月に文部省博物局(前述教育博物館の前身)が主催した湯島における博覧会が起源となる。この博覧会は、ウィーンで行われる万国博覧会の出品準備を兼ねていたもので、万国博覧会への参加のため、前年の1871年に設置されていた博覧会事務局は、日比谷門内から山下門内の旧佐土原及中津藩邸に移転し、翌1873年に合併された文部省博物館も山下門内に移転することとなった。その後、前述したように、この組織は内務省の所管となり、1875年に文部省博物館、書籍館、小石川薬園が分離されたが、その全ての標本類は内務省の博物館に引き継がれた。その後、数度名称が変更されたが、1877年に行われた第一回内国勸業博覧会に深くかかわりつつ、1881年に内務省から農商務省へと移管された後、上野公園に移転した。ブラキストンが「山下博覧会、山下博物館」から「National Museum in Ueno Park」(『BJ』1882)へと名称を変更したことに符合する。

これまでと同様に、ブラキストン・プライヤーの鳥類目録を参照してみよう。『BJ』1878で8種(記載313種中、1点の絵画資料を含む)、『BJ』1880で7種(記載325種中、1点の生標本を含む)、『BJ』1882で19種(記載359種中、1点の絵画、3点の生標本を含む)となる。記載数の増減については、標本がなくなったというよりは、上述したように「Tokyo Museums」として教育博物館と一括して記載されていることによるものだろう。

山下博物館が所蔵していた鳥類標本の概要については明らかとする材料を有していないが、もと文部省博物館に所蔵され、分離の際に引き継がれた鳥類剥製54点、1876年に購入した鳥類80羽、コウノトリ2羽、鷺1羽、鷺1羽が知られる。また1881年末の段階で天産部(動物全ての資料)の資料が71,362点、1885年末の段階で89,630点所蔵されていたとされることから、かなりの鳥類標本が所蔵されていたものと考えられる。しかし、ここで注目しておきたいのは、この博物館に所蔵されている絵画資料を利用してブラキストン・プライヤーが『BJ』を執筆していることである。現在東京国立博物館に所蔵されている博物館禽譜と呼ばれる資料は、当時博物館のスタッフであった田中芳男を中心として、江戸時代の禽譜を収集、また新たに制作されていた鳥類図譜であり(磯野 1992、佐々木 2001)、それらをブラキストン・プライヤーが利用していたことが理解される。田中がブラキストンらと深い関係にあったことは、『BJ』の序文に田中への謝辞があることから明らかである。

ブラキストンは単に博物館に所蔵されている図譜を利用するだけではなく、逆に図譜の制作にも協力している。ブラキストンが開拓使東京出張所に鳥類図譜制作のために標本を貸し出していたことはすでに述べたが、開拓使に貸し出した後、そのまま山下博物館に標本を貸し出していたこと、またそれらが博物館禽譜の中に含まれている鳥類図であることについても明らかとなっている(加藤 2003a、磯野 1992、佐々木 2001)。

1-5.札幌農学校標本室³⁷

札幌農学校は、教頭クラークの教育方針に基づき、農学関係科目のほか、基礎科学の動物学・植物学など自然史に関する教科が少なくなかったため、これらの教育に必要とされる標本類が必要であったこと、また教官陣が学生を連れて行ったフィールドワークの過程で収集された標本を納めるためにも動物学及び産業、ないし鉱物・地質・植物・動物標本室を持つ博物館の設置が急がれていた。しかし、その計画は予定通りには進まず、演武場の一部を利用した標本室の整備にとどまっていたという。この標本室の収蔵資料の状況は明らかではないが、明治16年に札幌農学校長であった森源三が「農学校内ニハ博物室アレトモ列品多カラス。列品採集ハ二、三年以来ノ事ニテ、多クハ廃使ノ際、東京出張所ノ博物場ヨリ持来リシ物品ニテ漸ク体裁ヲナシタリ³⁸」というように、上述した東京仮博物場の標本を引き継いだことで充実しつつあったようである。

ブラキストンは『BJ』1882で、Kaitakushi-museum から移管された Sapporo College Museum には33種(記載359種中)の鳥類標本があるとするが、この種数が東京仮博物場におけるものであったのか、農学校の標本全てを調査した結果であるのかは明らかとはならない。標本管理体制も明確ではなく、札幌農学校の標本室とブラキストンとの関係を明確にすることは困難である。

この標本室は後に札幌博物館と統合され、現在の北大植物園博物館に所蔵標本が引き継がれることになるが、現時点で農学校標本室由来と位置づけられる鳥類標本は見出しえていない。

1-6.札幌博物場(札幌仮博物場、札幌農学校所属博物館)³⁹

最後に、本稿の主たる検討対象である札幌博物場について、確認することとしたい。

札幌博物場の前身である札幌仮博物場は、1877年に開拓使札幌本庁により、偕楽園内に開設された博物館である。偕楽園内には、清華亭のほか、魚卵孵化所、温室、競馬場などが設けられた勸業施設の役割を持っていた。設立の目的は、「本道に産する天産、人工の物品を網羅蒐集して此に陳列し、時日を定めて開場し、衆庶に無料縦覧を許⁴⁰」することおよび「博覧会一切ノ事務ヲ掌ル⁴¹」ことにあり、開拓使の設立した他の博物場とほぼ同じ目的であった。この仮博物場は「年ヲ追テ物品増加シ場所狹隘展列ノ余地ナキ」状態となり、新たに博物場を建設する必要に迫られた。この計画は1880年に認可され、1882年6月に新館が完成した。これが札幌博物場であり、現在の北大植物園博物館本

館である。この建物が完成した際には、設立主体であった開拓使が廃止され、農商務省博物館、農商務省北海道事業管理局、札幌農学校へと移管されてゆく。これらの経緯については関(1991)が詳述しているので、ここでは省略することとしたい。

さて、以上のような経緯で活動をしていた札幌博物館の鳥類標本の収集状況について確認してゆきたい。札幌博物館時代には「年ヲ追テ物品増加シ」とあるように標本数が増加していたと推測されるが、年次ごとの増加状況は不明である。札幌博物館が設立された1882年に開拓使がまとめた標本点数は総数2,585点、うち鳥類標本は264点⁴²、同年7月に、開拓使から農商務省博物館が博物館を引き継いだ時点での総標本数は2,824点、うち鳥類標本は256点(123種)⁴³であった。8点ほど減少している理由は定かではないが、おおよその状況を示しているものと考えてよからう。この総資料点数には、廃止された東京博物館の標本・資料⁴⁴も含まれているものと考えられるが、同場の鳥類標本は札幌農学校標本室に移管されているので、ここにあげた鳥類標本の点数は、札幌博物館独自で収集したもののみなしう。函館博物館がブラキストン標本以外の鳥類標本をほとんど所蔵していなかったのに対して、積極的な収集の様子をうかがうことができる。開拓使廃止後も収集は積極的に行っていたようで、札幌博物館が札幌農学校に移管された1884年段階で、標本総数6,055点、うち鳥類標本402点(132種)⁴⁵、札幌農学校の標本室と統合された後と考えられる1885年段階で標本総数6,429点、うち鳥類標本491点⁴⁶というように、その充実が目覚ましいものがある。このように仮博物館時代から、標本の充実を目指していた札幌博物館だからこそ、函館博物館にあるブラキストン標本の移管をもくろんだものと考えられる。

ブラキストンは、札幌博物館の鳥類標本について次のように記している。『BJ』1878には札幌博物館の存在は見出せないが、『BJ』1880ではハクチョウ、ヒシクイ、タンチョウ、ショウドウツバメの4種が所蔵されており、『BJ』1882では103種(359種中)の標本があるとする。ブラキストンの記す種数の増加からも、札幌博物館の標本充実について知ることができる。

さて、このような標本の充実を図っていた札幌博物館の職員体制はどのようなものであったのだろうか。札幌博物館時代の職員は、雇一人(内藤梅吉)、小使一人(酒井長吉)の2名体制であったことがわかっている。現在北大植物園博物館に所蔵される鳥類標本のうち、採集時期が1878年から1881年にかけてのものが100点近くあり、彼らを中心として標本を収集していたものと考えられる⁴⁷。札幌博物館へと施設が移った後の1882年7月には二等属仁田登、六等属山口吉太郎、准判任官御用掛山口義幸、内田藩、伊藤一隆、足立元太郎、雇内藤梅吉の7名体制となった。足立および伊藤は「博物館動植物名称順序等取調ノ為メ」札幌県准判任御用掛との兼務となっており、札幌農学校卒業生の能力を生かすべく配置されたものと考えられる。さらに、翌年2月には、上記7名に加え、七等属斉藤実昭、場雇矢作利助、看守人椎名佐次郎、小使酒井長吉の名前も見ることができる⁴⁸。函館博物館のように、「看守」という職名ではなく、調査のためのスタッフが配置されていたという点に札幌博物館の特徴があったといえよう。ただし、教育博物館が行っていたような欧米の博物館との交流は見出せない。現れるのは、札幌農学校が東北帝国大学農科大学となり、八田三郎が教授として赴任した1900年前後のものが古いものである⁴⁹。

以上、ブラキストンがかかわった各博物館の状況について概観してきた。国立博物館や教育博物館のように国を背負って活動していた博物館は、その収集体制において開拓使の各博物館と一線を画していた。一方、「第三の系統」(椎名1989)とされる開拓使系の博物館は、その設置目的が北海道の物産陳列、博覧会への準備というものであったがゆえに、収集の方針が北海道を中心とした物産の「陳列」に重きを置いていたという点に特徴があり、教育博物館・国立博物館と同列に扱うことは妥当ではないだろう。本稿の主たる関心である札幌博物館を、開拓使系の博物館と比較して評価するならば、札幌博物館は、伊藤一隆・足立元太郎といった札幌農学校卒業生を擁し、人事・予算面において、所蔵標本・資料をより学術的に活用できるような体制を整えていた(関1991)。鳥類標本においては、ブラキストン標本に依存していた函館博物館とは異なり、独自に充実を図っており、その延長で函館からのブラキストン標本の移管を試みたものと推測される。標本移管こそ失敗したものの、『BJ』に見るように、所蔵標本数の増加は顕著であり、ブラキストン自身もこの標本を調査・利用していたものと考えられ、「陳列場」ではなく、博物館としてもっとも

充実していたといえよう。しかし、他の開拓使系博物場が行ったようなブラキストンとの協力体制が確認されないことから、その実態はあまり知られていないのも現状である。もとより、ブラキストンと札幌博物場とのかかわりは『BJ』以外に知ることができないのも事実であるが、以下に札幌博物場とブラキストンとの関係をうかがわせる断片ともいふべき事例について報告することとしたい。

3. ブラキストンの採集したノガン

3-1. ブラキストンと札幌の関係

ブラキストンは、札幌について「Japan in Yezo」の一章(第22章)を割いて著している。ここでは札幌の状況についてそれほど好意的な表現をしていないが、「札幌が成長していく各段階を続けて見てきた」と記述しているごとく、長い滞在期間中に幾度も札幌を訪れているようである。北大植物園博物館に現存するブラキストン採集鳥類標本のうち、札幌で採集した標本は300点を超え、採集時期も1874、75、77、78、80、81、82年とほぼ毎年である。これらの中には当時札幌に勤であった福士が採集したものも含まれている可能性もあるが、一時期に集中して多数の標本がある時期(77年4～6月、78年4～6月、82年6月、9～10月)などはブラキストンが滞在していた時期のものと考えてよからう⁵⁰。特に、6月前後の標本が多い理由は、札幌で開拓使に雇われていたエドウィン・ダン(後にブラキストンとは義兄弟になる)が記したように「殆ど毎年豊平川にやって来て、(鱒釣りをしている：引用者補記)われわれの一行に加わっ」ていたためと考えられる(高倉編 1962)。

ブラキストンと札幌の関係については、以上のようなものしか明らかとはならず、『BJ』における記述を除けばブラキストンと札幌博物場との関係は、ほとんど見出すことができない。しかし、『BJ』1882において、札幌博物場のある標本についてのブラキストンの記述は検討に値するものである。

3-2. Birds of Japan のノガン記載

『BJ』の中に記載される種の中で、ノガン(*Otis tarda*)に関する記載は、極めて異彩を放っている。『BJ』1878では、印刷行数にして4行、『BJ』1880で7行の記述に過ぎなかった記載が、『BJ』1882になると3頁、80行にまで急増するのである。『BJ』の中で、これほどの文章が1種に割かれていることはなく、きわめて特徴的である。長文になるが、引用することとしたい。

『BJ』1880

152. OTIS TARDA, L.

Bustard. Jap. 'No-gan.'

A bird supposed to be a great Bustard was brought into the Hiyaugo market quite fresh in December, 1876. It weighted 13 1/2 pounds. It probably was of this species, which is found at Shanghai, Hankow, and Peking in winter. The Japanese are acquainted with the bird, and their ornithologists class it with the geese.

『BJ』1882

152. OTIS TARDA L. (?)

[514] Great Bustard Jap. 'No-gan'

A bird supposed to be a Great Bustard was brought into the Hiogo market quite fresh in December, 1876. It weighed 13 1/2 pounds. It probably was of this species, which is found at Shanghai, Hankow, and Peking in winter, according to Swinhoe's 'Revised Catalogue,' (P.Z.S., 1871, p.402), where he notes having a female from Shanghai "smaller than the ordinary European bird, and more broadly banded with black on the upper parts," and mentions a small species observed by Pere David near Peking.

Japanese were aware of the existence of a Bustard, and gave the Shimosa plains to the eastward of

Tokio as one of the localities where it was to be found, but we were unable to obtain any examples until last year Mr. Edwin Dun of Sapporo was fortunate enough to kill two while out shooting with one of the authors on the 11th and 13th November, near the mouth of the Iskari River on the north-west coast of Yezo. These two specimens were preserved. One of them is mounted in the Sapporo Museum, and the other has been sent to Mr. Seebohm in London for proper identification. They both appear to be in their second year, say about eighteen months old. The organs of generation were not clearly discernable in either, owing to damage of the parts by shot, but one seemed to be a young female. The crops and stomachs contained herbs (artemesia, dandelion, etc.), and grasshoppers. There was no sign of the water-pouch, mentioned by Yarrell as belonging to the male, in either; nor do they agree with his description of adults of *O. tarda*, but we are inclined to believe they would corespond with birds of that species of the age we take them to be. The principal points of difference from Yarrell's description are as follows:

First Example. (Sapporo Museum specimen) young female?

Length 790mm. (=31 in.).

Wing 480mm. (=18.75in.).

Bill along gape 65mm. (=2.5in.).

From front of nostril to end of bill, 25mm. (=1.0in.).

Tarsus, 120mm. (=4.75in.).

Middle toe with nail, 62mm (=2.44in.).

Extent of outstretched wings, 1550mm. (=61in.).

2nd and 3rd primaries the longest, 5th equal the 1st. Iris of eye, dark hazel. Legs, feet, and bill, dusky-slate, lower mandible lightest. Weight, 6pounds. Chin, pure white. Neck, delicate lavender. All under parts white. Primary quills white, running into dusky towards the tips. There are no plumes from the chin, nor bare space under where they should be. A few mottled woodcock-like feathers on the top of the head. On the inner webs of each of the third, fourth, and fifth primaries, just where they suddenly narrow, about eight inches from the end of the wing, a small spot of white. There is more black on the back than there should be in an adult, the wing-coverts are turning white, the centre tail feathers not being yet tipped with it. Evidently changing in most parts from the woodcock-like plumage of an immature bird.

Second Example (spec. No.2756 sent to Mr. Seebohm).(以下略)

(下線部引用者)

『BJ』1880 執筆段階ではブラキストンには利用できるノガンの標本がなく、その存在を示すのみであったのが、下線部に見るように、『BJ』1882 発表の前年、11月11日と13日の2日にわたって、札幌のダンと鳥類目録執筆者の一人が石狩川口において2羽のノガンを撃ち、採取したことで、その計測データが詳細に記述されることになったものである。採集者のダンとは、前節で触れたエドウィン・ダンであり、執筆者の一人(with one of the authors)とはブラキストンである。彼らが採取したノガンの標本は、「One of them is mounted in the Sapporo Museum, and the other has been sent to Mr. Seebohm in London for proper identification」とあるごとく、本剥製にした1体が札幌博物場へと保管されることになったのである。これに関する資料があるので、これらについても確認しておきたい。

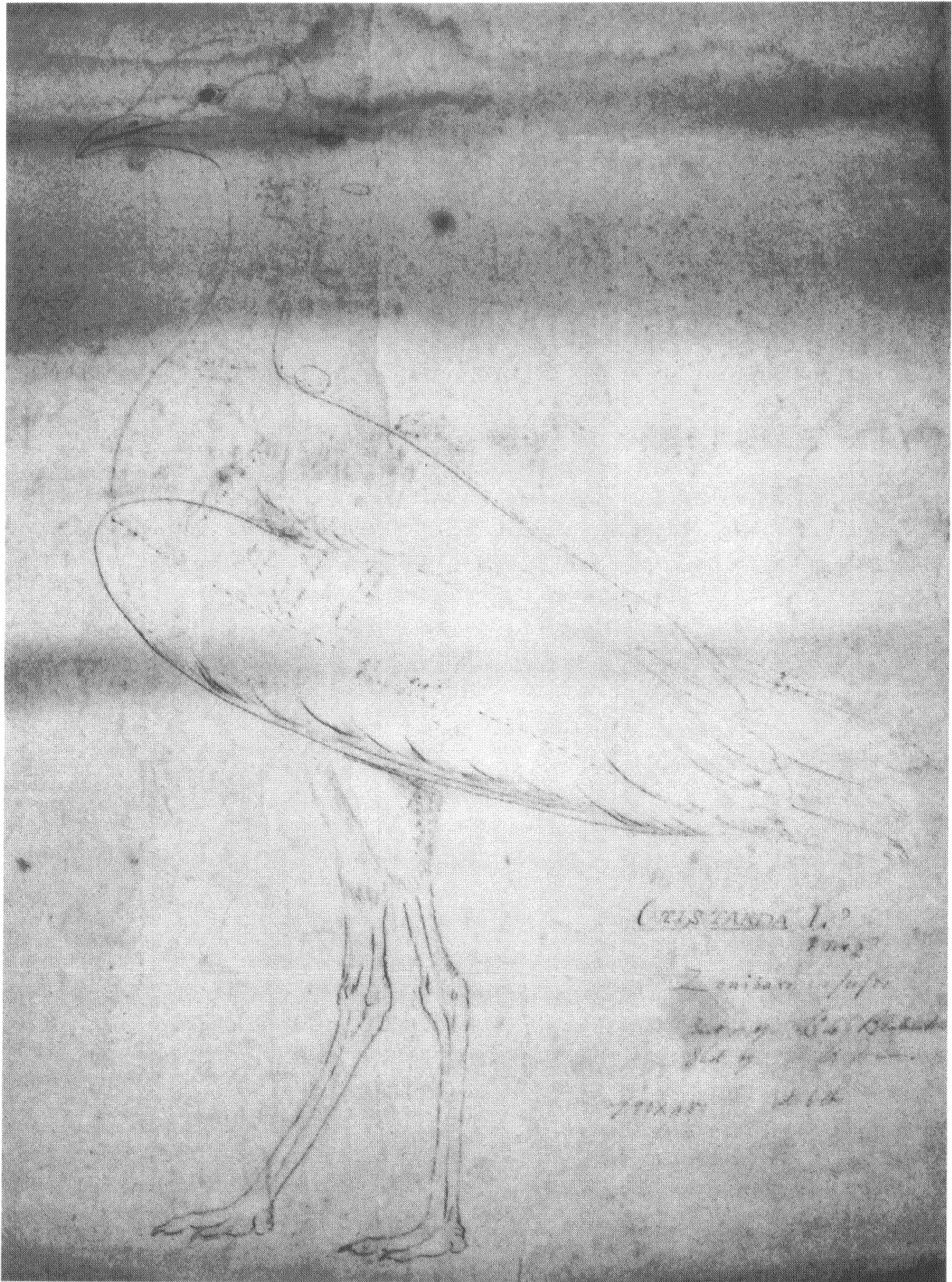


写真2 ノガン図〈標本番号33311〉

3-3 伊藤一隆によるノガン図

ダンとブラキストンによって採取されたノガンについては以下に掲げる史料がある。

東京

開拓使残務取扱

小牧昌業殿

札幌

同上

内海利貞

昨十四年十一月英商ブラキストン氏ボーマン氏ト共ニ錢函海岸ニ於テ獵獲スル所ノ野鳥一羽博物場へ出品致候處、該鳥ハ未本邦ニ見馴レサルモノニテ、其鳥名ヲ知り難候、或ハ英國ノ「ボスタード」ニ類似シタルヲ以テ出品主ヨリ英國へ問合、追テ其実否通知之アル筈ニ付右確報ヲ得次第其趣届出候心得ノ處、逐々数月ヲ經過候へ共、未タ該報無之ニヨリ右署報候旨、今般同場係伊藤一隆ヨリ別紙ニテ返申出候条、為御心得此段及御通報候也、

明治十五年四月十九日

明治十四年十一月十一日英商ブラキストン氏札幌ニ滞留セシ際、御雇教師ダン氏ボーマン氏ト共ニ錢函海岸ニ遊獵セシニ、一種ノ野鳥ヲ獵獲シ当博物場へ出品セリ、該鳥タルヤ其景状七面鳥ノ雌ニ類似シ脚稍長ク、大サ嘴尖ヨリ首根マテ十一インチ半、首根ヨリ尾根マテ九インチ半、尾根ヨリ尾尖マテ九インチ、肩尖ヨリ翅尖マテ二フット六インチ半、地面ヨリ背上ニ至ルーフット五インチ、重量六ポント、此鳥ハ英國ニ於テ食料ニ貴重セラルハ處ノ大「ボスタード」(Otis tarda)ト同属ナレトモ其何種ニ属スルヤ判然スル能ワス、而シテ重量形状モ亦大「ボスタード」ヨリハ輕、且小ナレトモ恐クハ同属同種ノ雌或ハ雛ナルモ計ラレス、故ニ又其後ニ至リ再ヒ前三氏同所ニ遊獵シ打殺シ得ル同鳥ヲ以テ其何種タルヲ識別セント欲シ、以テ英國ニ送ル故ニ、其確報ヲ待ツテ廣ク報知スベケレトモ、今茲ニ其概略ヲ報告仕候也、

博物係

御用係 伊藤 一隆

十五年四月十四日

附言、下総地方ニ於テ野厂ト称スルモノハ大「ボスタード」同種ナルノ説アリ、又千八百七十六年十二月兵庫ノ市場ニテ該鳥ヲ見タリトノ説アリ、該鳥ハ冬時北京上海等ニ居ルト云爾⁵¹

これらは、剥製がブラキストンから寄贈された翌年 2 月に開拓使が廃止されたことにより、その残務取り扱いを担当していた部局の書類である。これによれば、1881 年 11 月 11 日ブラキストンはダンとボーマー(レイス・バーマー)とともに錢函海岸で遊獵しており、そこで得られた鳥の剥製を札幌博物場に出品することとなったが、その鳥は日本では見慣れない鳥であるため、その種名を明らかにすることができないままであった。英国産の「ボスタード」(ノガン)に類似しているため、ブラキストンが英国に問い合わせることになっており、その情報に基づいて報告する予定であったが、数ヶ月を経ても返答がないため、札幌博物場の伊藤一隆が調査した結果を報告することとなった、といったところである。

この伊藤の調査を裏付ける資料が、北大植物園博物館に保管されている。「ノガン図」(標本番号 33311)は、1882 年の開拓使の廃止後、北海道事業管理局に札幌博物場の管理が移管された時点および 1884 年に博物場が札幌農学校に移管された時点での移管資料リスト⁵²両者に含まれており、札幌博物場由来のものであることが確認される資料である(加藤 2001)。この図は展示用のものではなく、ペンでおおよその姿が描かれ、計測値が書き込まれているという、いわば調査用のスケッチである(写真 2)。

この「ノガン図」の右下には、「Otis tarda L.? Juv. ♀?, Zenibako 11/11/81 Shot in by Cap. Blakiston Shot by

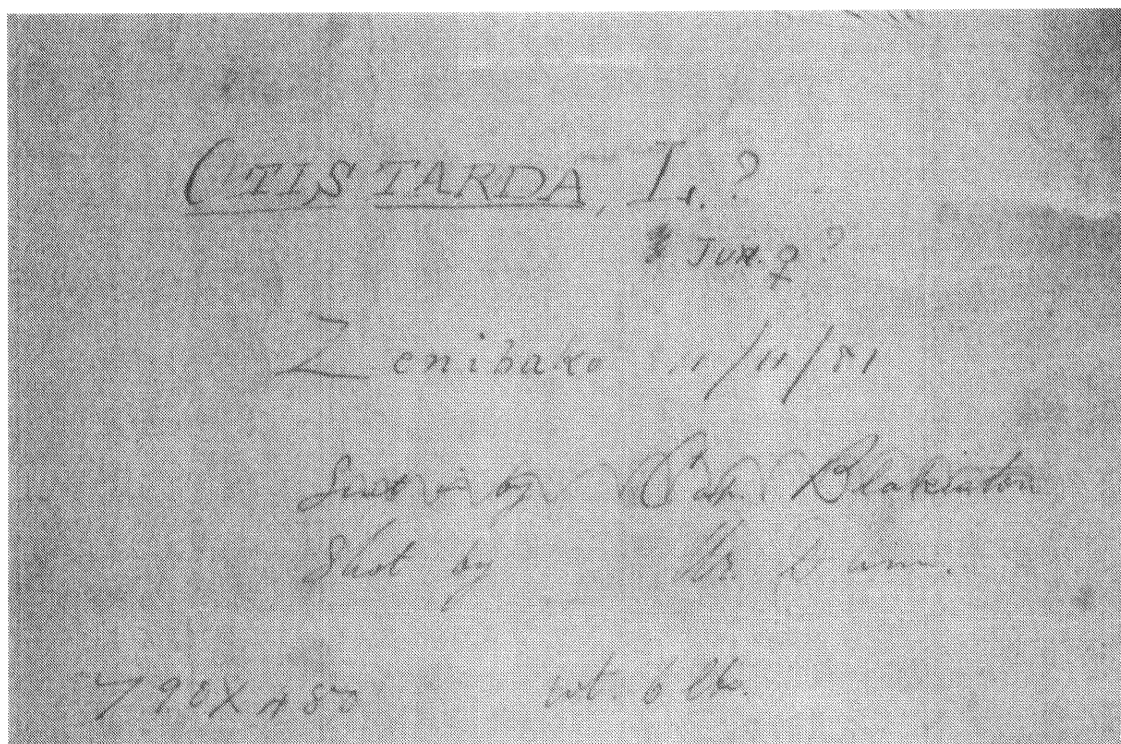


写真3 ノガン図脇の採集データ

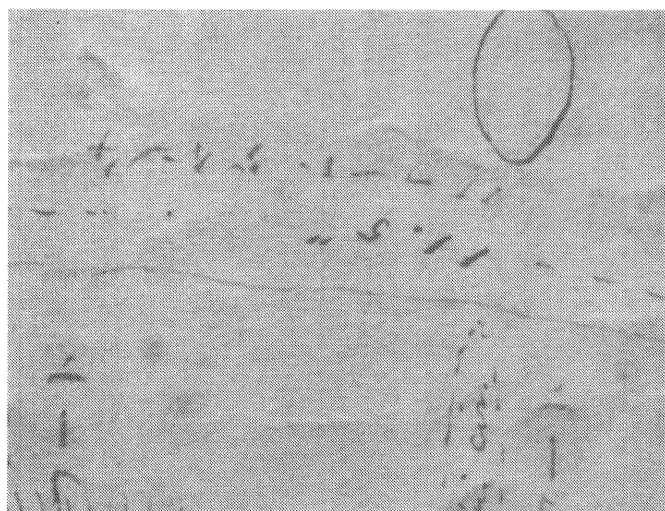


写真4 ノガン図背部の計測値

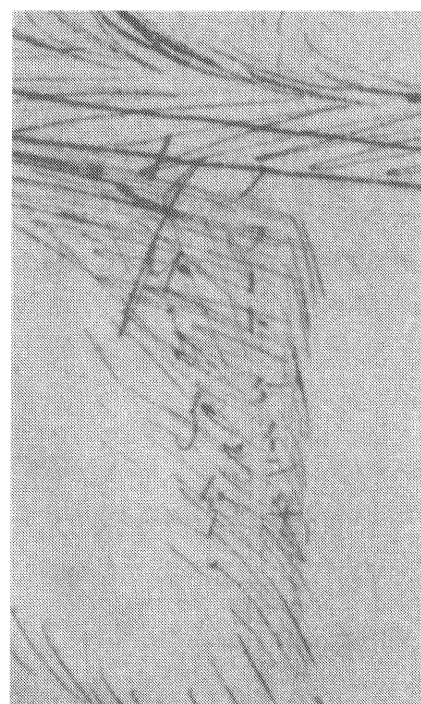


写真5 ノガン図脚部の計測値

Mr.Dun 790×480 wt.6lb」という記載がある(写真 3)。「Shot in by Capt. Blakiston」の文字が抹消されていたため、これまであまり注目されることのなかった図であるが、ここに記載されている情報は、明らかにこれまで考察してきたノガンのものと合致する。図に記載してある計測値は、写真に見るように、

嘴の先から首の付け根まで：11 インチ半(写真 4)(ただし、11 フート 5 インチと記載してある)

首の付け根から尾羽の付け根まで：9 インチ半

尾羽の付け根から尾羽の先まで：9 インチ

肩の先から羽の先まで：2 フィート 6 インチ半

地面からの高さ：1 フィート 5 インチ(写真 5)

重量 6 ポンド

という開拓使残務取扱掛に提出された伊藤一隆のデータと合致し、この「ノガン図」が伊藤一隆の手によるものであることは明らかである。

さて、この「ノガン図」のモデルとなったダン・ブラキストンが捕獲し、札幌博物館に出品したというノガンの剥製そのものは確認できるであろうか。現在、北大植物園博物館が所蔵するノガン標本は 2 点ある(標本番号 9302(以下剥製 A(写真 6))、標本番号 39011(以下剥製 B(写真 7))。これらはともに本剥製であるが、1961 年以降に付与された管理ラベルに記載される標本番号以外に情報はなく、このままではいずれがダン・ブラキストンの捕獲したノガンであるのか、あるいは、どちらでもないのかを明らかにすることはできない。節を改めて、北大植物園博物館のノガン標本の歴史について検討することとしたい。

3-4 札幌博物館、北大植物園博物館のノガン標本

まず、北大植物園博物館のノガン標本についての情報を整理することとしたい。データの無い標本の由来を探るために、現存する博物館の資料管理にかかわる史料・整理カード類にノガンの記載があるか確認してみたい。

ブラキストンから札幌博物館にノガン標本が寄贈されたのが 1881 年である。その翌年札幌博物館は開拓使の廃止に伴い、農商務省北海道事業管理局の管轄下に入る。その移管作業の中で作成された資料目録⁵³の中に、「野厂 一点」の記載がある。おそらく、これがブラキストンから寄贈されたノガンであろう。次に、1884 年、札幌博物館が札幌農学校に移管された際に作成された資料目録⁵⁴の中にも「野厂 1」の記載がある。1884 年段階で、ノガン標本は 1 点のみ所蔵されていたことが確認される。

これらの資料目録の次に利用されたと考えられる目録は、「札幌農学校所属博物館標本採集日記」⁵⁵(以下「採集日記」)である。この目録には、1886 年 3 月以降に採集、入手されたあらゆる分野の標本・資料がほぼ年代順に、大正初年まで記載されている目録であり、それぞれの資料に類別番号(分類ごとの通し番号)が付与されているものである。「採集日記」に記載される最初の標本は、1886 年 3 月 2 日採集のウソ(類別番号 501)であり、これ以前に収集された 500 点の鳥類標本については記載がない。このためブラキストンが寄贈し、上述二目録に記載のあるノガン標本は「採集日記」中に見出すことはできない。さらに、「採集日記」中には他のノガンの記載もなく、明治期にノガンが標本として博物館に所蔵されるようになったことはないかのように考えられる。しかし、この「採集日記」は、これのみで標本を管理していたのではなく、標本を分類した「類別簿」と並行して管理されていたことが「採集日記」中の記載から知られることに留意しなければならない。類別番号欄に「自 717 至 834」と記載された鳥類標本は、22.12.18 農学校教室ヨリ受入、類別簿ニ記入済」とあるように、1889 年に農学校から移管された 110 点あまりの標本を個別に記載するのではなく、一括登録しており、この中に別のノガンの標本が入っていた可能性もあるからである。ただ、後述する他の史料から明治期に新たなノガンが収蔵された形跡はないので、ノガンについては大きな問題とはならないものと考えられる。

次に利用できる資料は、北大植物園博物館旧事務所に保管されていた「調査用 北海道産鳥目録」である。これは、1901 年段階の鳥類標本数と 1880 年から 1902 年にかけての採集年次毎の標本数が記載されているものである⁵⁶。この目録において、ノガンは 1881 年の 1 点のみが記載され、1902 年段階でも所蔵ノガン標本は 1 点であることが確認さ

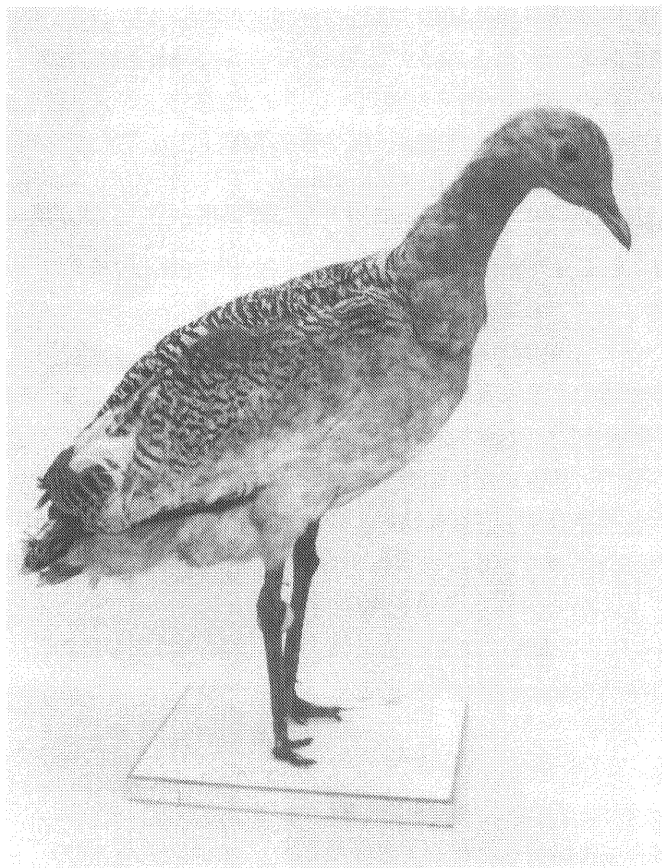


写真6 ノガン剥製(剥製A)
〈標本番号9302〉

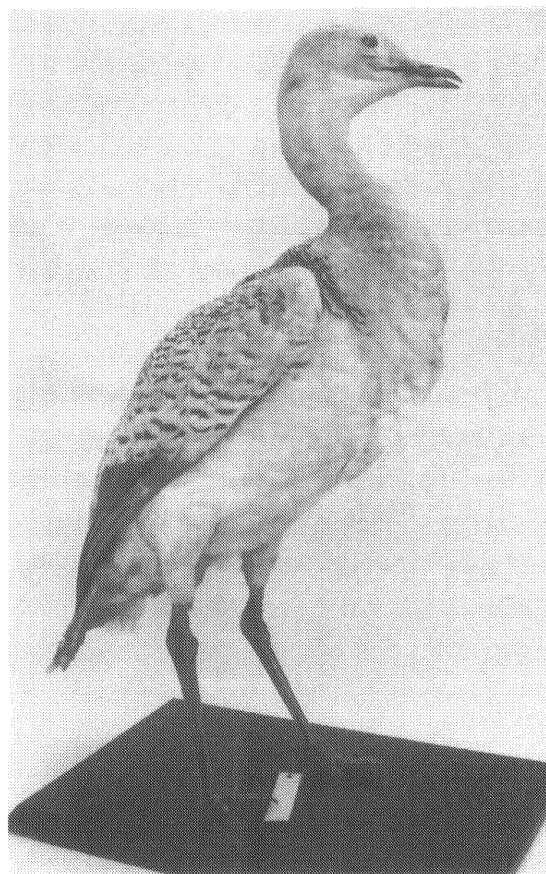


写真7 ノガン剥製(剥製B)
〈標本番号39001〉

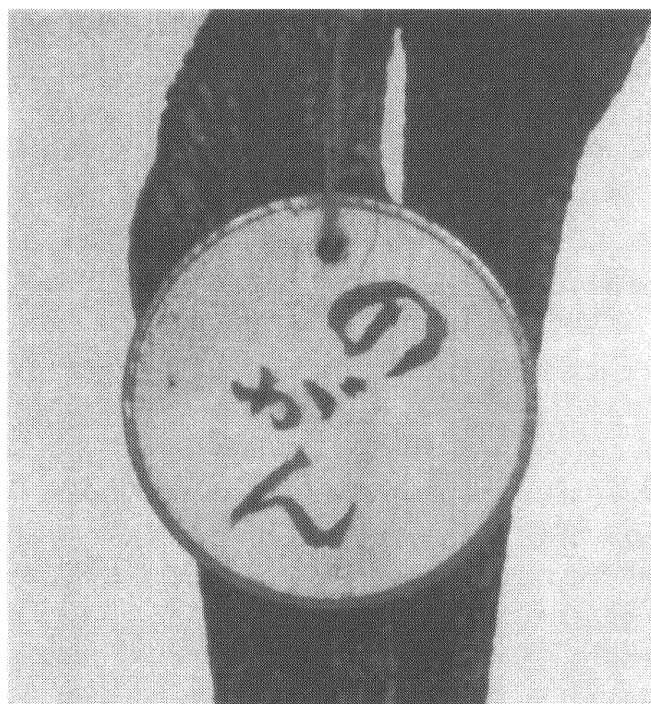


写真8 剥製Aに付属するラベル

れる。ここまで確認した史料、目録上に見るノガン標本は1882年以前の収集であることは確認されるものの、ブラキストンが寄贈したものであることを証明することはできなかったが、この目録によりノガン標本の採集年が1881年であることが明らかとなり、所蔵ノガン標本がブラキストン寄贈の標本であると断定することができる。

次に、「採集日記」の記載が終了するのとほぼ期を同じくして刊行された博物館の展示資料目録『札幌博物館案内』(村田編 1910)がある。これは、展示目録という性格上、全ての所蔵資料を網羅するものではないことに留意しなければならないが、記載によれば、当時博物館にノガンが1点展示されていたことがわかる。そこには「のがん♀ 一四、一一、後志国銭函村、大なる野鳥にして、しちめん鳥の雌に酷似せり、往昔開拓使時代本道海濱にて見ることありしも現今其の影を見ず」という記述がある。この情報は、まさしくダンとブラキストンが捕獲したノガンのものであり、1910年に博物館に展示されていたノガン標本が、ブラキストンの寄贈標本であると確認される。

さらに、この『札幌博物館案内』と同じ時期までに利用されてきたと考えられる鳥類標本カードがある。詳細については煩雑になるので、別稿にて紹介することとするが、保存されているカード2,389枚のうち採集日の最も下る標本は1910年6月1日のものであることから、1910年ごろまでの標本の状況を示しているものである。このカードには「採集日記」に見ることのできない1886年以前の標本や、「本校ヨリ」と記載のある標本のカードも含まれていることから、「採集日記」の情報よりも詳細な標本の情報を得ることができるものである。このカードの中にもノガンは1点のみ含まれており、「小樽郡銭函村、十四年十一月十二日、254、剥」という記載がある。「十二日」は、これまでに見た史料の「十一日」と異なるものの、筆写の際の誤写と見ることができるので、やはり、1910年ごろに博物館に保管されていたノガンの剥製は、ブラキストン寄贈のもののみであると考えられよう。

これ以降に利用されたと考えられる目録などは断片的なものにとどまり、ノガンが何点所蔵されていたのかを知ることにはできないので、ここまで確認することができた情報に基づいて検討してみたい。

まず、2点のノガン剥製のうち、剥製Aには、和名の記載された丸いラベルが付属している(写真8)。このラベルは、他の標本にも見ることができるもので、特徴としては展示用の本剥製に付属する傾向がある。ラベルの両面に和名の記載があることから展示の際のキャプション代わりに利用された可能性が高い。更に、このラベルが付属する標本には他の資料情報が記載されたラベルが付属していないことも、これらの剥製は展示されるために管理が行われていた可能性を示唆する。加えて、このラベルには「あをじ」(標本番号 8120)、「すゞめ」(標本番号 8107)などといった古い仮名遣いがされており、この特徴は、『札幌博物館案内』の記載と共通である。

しかし、このラベルの付属のみをもって、『札幌博物館案内』掲載のノガン剥製であると判断することは慎まなければならない。標本カードや『札幌博物館案内』に資料情報が記載されているにもかかわらず、標本そのものに現時点で情報がないのであるから、和名の記載された展示用ラベルが本当に『札幌博物館案内』の時期に利用されていたかを証明できないからである。過去に述べたように、『札幌博物館案内』の編集者であった村田庄次郎はアメリカに鳥類標本を送る際に日本語のラベルを外していたことが確認され(加藤・市川 2004)、『札幌博物館案内』さえあれば、情報管理が出来ると考えて外したのかもしれない。しかし、『札幌博物館案内』に掲載されている標本とみなしうる標本の全てについてラベルが外されているわけでもなく、軽々に判断を下すことはできない。このラベルの利用時期、目的については、更なる検討が必要であろう。ここでは、このラベルが付属している剥製Aが古い時代に展示されていたと考えられるという判断のみを下しておくこととする。

次に、剥製そのものから、その製作年代を検討することとしたい。剥製Bの内部には綿が詰め込まれている。これに対して、剥製Aには、麻か樹皮と考えられる繊維が詰められている。これにより、剥製Aの方がより古いものと考えられることができるが、これだけでは剥製Aが札幌博物館由来のものであると断言することはできない。古い時代に製作されたノガンの剥製が1910年以降に北大植物園博物館に寄贈されたという可能性を排除できないからである。ここで、ブラキストンがノガンを寄贈した時期の札幌博物館の標本製作方法について検討することとしたい。

ブラキストン自身が剥製を製作する場合、剥製の内部に綿ないし紙を入れ、腹部を縫合しない状態の仮剥製で保管していたと報告されている(高倉ら 1986)。実際は縫合してあるもの、していないものがあるが、基本的に綿を入れて仮剥製として製作されている。寄贈されたノガンの標本がブラキストンの手によって製作されたとするならば、剥製

B の剥製がブラキストン製作の標本としてみることができる。しかし、ノガンの剥製がブラキストンの用いた仮剥製ではなく、本剥製であることを考えるならば、陳列のために札幌博物館で製作された可能性も提示できる。そこで、ブラキストンからノガンが寄贈された 1881 年ごろの採集情報を持つ剥製について調査を行ったところ、次のような結果を得ることができた。

・ハイタカ	〈標本番号 4262〉	1881 年 9 月	札幌	：内部	綿
・シジュウカラ	〈標本番号 39942〉	1881 年 10 月 19 日	札幌	：内部	綿
・オオルリ	〈標本番号 39998〉	1881 年 11 月	札幌	：内部	綿
・シマフクロウ	〈標本番号 13291〉	1881 年 11 月	札幌	：内部	麻ないし樹皮繊維
・カワガラス	〈標本番号 8143〉	1881 年 11 月	札幌	：内部	麻・樹皮繊維を綿でくるむ
・オシドリ	〈標本番号 7472〉	1881 年 11 月 4 日	札幌	：内部	麻ないし樹皮繊維

これらの鳥類標本に加え、1879、1881 年に札幌市内で捕獲されたエゾオオカミの剥製（標本番号 9889 および 9890）の内部には木屑と鹿の毛が詰められていたことを考え合わせるならば、当時の札幌博物館では中型以上の鳥獣類の剥製を製作する場合に、綿ではなく麻や樹皮などを詰め物として利用していたと考えることができよう。ブラキストンの捕獲したノガンが札幌博物館によって製作されたと考えた場合、剥製 A がそれに該当する可能性が高いと考えられる。

剥製 A が古い時代に展示されていたと考えられること、製作方法がより古く、札幌博物館で行われていたと考えられる手法で製作されていることを考え合わせるならば、ノガン剥製 A がブラキストンとダンが銭函で捕獲したものであると考えてもよいのではないだろうか。最終的な判断については、付属ラベルの検証や他の調査も必要であり、今後の課題としておきたい。

一部留保せざるを得なかった点もあるが、ノガン剥製、ノガン図、伊藤一隆の報告書が、これまでに知られていないブラキストンと札幌博物館との関係を明らかとすることができた。しかし、これのみをもってブラキストンと札幌博物館が緊密な関係にあったということとはできないだろう。ブラキストンがノガンを寄贈した理由がどこにあるのか、更に検証することとしたい。

4. 札幌博物館の能力—むすびにかえて—

ブラキストンはなぜ、自らのコレクションが所蔵されていて、また自宅に程近い函館博物館ではなく、札幌博物館にノガンを寄贈したのだろうか。理由の一つとしては、ブラキストン標本の札幌博物館移管計画が影響しているものと考えられる。札幌博物館の移管希望に対して前向きな返答を行ったのは、ノガン捕獲のわずか二日前のことで、函館側からの差し止め依頼もなかった時点で、ブラキストン自身は将来自分のコレクションが札幌博物館に保管されることになることを予想して寄贈したのかもしれない。また、札幌博物館の標本の充実もブラキストンの行動に影響を及ぼした可能性もある。ブラキストンが函館博物館からの移管の受諾の手紙に「I believe that this addition to the New Museum, will make it, in an ornithological way, the most complete in Japan at the present time⁵⁷」と記したごとく、ブラキストンにとっては鳥類学にどのように貢献すべきかを重視しており、札幌博物館の体制が、ノガンの保管のためにはよりふさわしいと評価したのかもしれない。仮に札幌博物館をブラキストンが高く評価していたとするならば、1879 年の函館博物館への寄贈時とは異なり、1881 年段階でブラキストンと札幌博物館の関係はより緊密であったといえよう。

しかしながら、札幌博物館の能力はブラキストンが期待するほどのものであったのだろうか。もちろん標本収集能力は他の開拓使の博物館に比べて高いものであったことはこれまで確認してきたとおりである。しかし、伊藤一隆の作成したノガン図をあらためて確認するならば、次のような記述があることに留意しなければならない。開拓使残務取扱係に提出した計測値の他に、ブラキストンが『BJ』1882 に記した計測値「790×480」が書き込まれている（写

真3、この記載は後筆と考えられる)。また、伊藤が提出した書類にある「附言、下総地方ニ於テ野ノト称スルモノハ大「ボスタード」同種ナルノ説アリ、又千八百七十六年十二月兵庫ノ市場ニテ該鳥ヲ見タリトノ説アリ、該鳥ハ冬時北京上海等ニ居ルト云爾」という記述は、『BJ』1882の「Japanese were aware of the existence of a Bustard, and gave the Shimosa plains to the eastward of Tokio as one of the localities where it was to be found」および『BJ』1880、1882の「A bird supposed to be a Great Bustard was brought into the Hiogo market quite fresh in December, 1876」、
「It probably was of this species, which is found at Shanghai, Hankow, and Peking in winter, according to Swinhoe's 'Revised Catalogue, where he notes having a female from Shanghai」という記述のままである。伊藤は、ブラキストンが英国に送った標本の情報を元にこの鳥がいかなる種であるかを報告するのを待っていたが、連絡がないため自身の調査結果を報告したとしている。しかし、ブラキストン自身は伊藤による報告以前にこの標本について、すでに『BJ』1882にまとめてしまっている。ブラキストンの記述が伊藤の調査結果に基づいているとするならば、ブラキストンは何らかの謝辞を述べているであろうし、伊藤自身ノガン図にブラキストンの計測値を書き込んでいるところを見ると、伊藤の調査報告は、自身が計測したデータ以外はブラキストンの調査結果の引き写しと見るべきである。このようにしてみると、職員・予算・標本収集の充実が見られた札幌博物館においても、ブラキストンが行っていたような種の同定や記載というレベルでの活動、特に普段観察することのない、迷鳥のようなものの判断は困難であったのだろう⁵⁸。もちろんこれは現在の我々からの評価であり、当時としては十分な能力を兼ね備えていたと見るべきである。しかし、1882年および1884年の札幌博物館の所蔵品目録⁵⁹をみれば、函館博物館の標本管理体制と同じく、管理番号による管理はなされておらず、ブラキストンが行っていたような学術的な利用に耐えうる標本管理を行ってはいなかったようである。函館博物館における標本管理の不備が、ブラキストンの帰国時に全てを残していかなかった理由とするならば、札幌博物館においても同様の問題を抱えていたということができる以上、札幌博物館の機能を過大に高く評価し、ブラキストンとの関係についても必要以上に緊密であったということはいえないだろう⁶⁰。

本稿は1881年11月ごろにブラキストンがノガンを寄贈し、それを受け取った札幌博物館の対応について紹介し、当時のブラキストンと札幌博物館の関係の一端を明らかにするとどまった。ブラキストンと各博物館の関係は、函館博物館への標本寄贈、札幌博物館の新営と移管依頼、ノガンの捕獲、開拓使の廃止による博物館管轄の移動、ブラキストンが帰国することになったそれぞれの時点で、ブラキストン側、博物館側双方の状況による要因が絡み合っただけで、事実として行われたことを列記することはできたとしてもブラキストンがおのおのの時点でどのように博物館を見ていたかについては、さらに事例を集めて検証を継続するべきものと考えられたためである。

本稿の成果は微々たるものではあるが、函館博物館の所蔵資料点数の検討および札幌博物館に寄贈されたノガン標本の検討により、これまでブラキストンが自らの標本を日本に残すことに意義があると考えて標本を寄贈したという「通説」は、1879年の当初寄贈の時点では該当するかもしれないが、最終的にブラキストンがとった行動を客観的に見るならば、必ずしも該当するものではないことを確認することができたという点、黒田(1958)に掲載される後志産のノガンが剥製Aであると考えられることおよびそれに関連する資料を見出したことを一応の成果とし、明治期における北海道の博物館と周辺に存在した外国人ナチュラリストたちとの関係を明らかにするための一礎石となれば幸甚である。

本稿をまとめるにあたり、ダンとブラキストンが捕獲したノガンに関する史料についてご教示いただいた富士田金輔氏を始め、北海道開拓記念館三浦泰之氏、北大植物園博物館市川秀雄氏、日本鳥学会梶田学氏からご教示をいただいた。また、史料閲覧に際し、北海道立文書館および市立函館博物館、市立函館図書館には多大な便宜を図っていただいた。末筆ながら記して謝意を表します。

(引用・参考文献)

- T. W. Blakiston.1883:「Japan in Yezo: a series of papers descriptive of journeys undertaken in the Island of Yezo, at intervals between 1862 and 1882」、In-house reproduction、Originally published: Yokohama: Published at the "Japan Gazette" Office、"Originally published in the 'Japan Gazette' February to October 1883, and reprinted in this form by request"
- T. W. Blakiston.1882:「Ornithological Notes」『The Chrysanthemum』pp424-428、pp471-475、pp521-525
- T. W. Blakiston.1883:「Ornithological Notes」『The Chrysanthemum』pp26-36、pp76-81、pp172-174
- T. W. Blakiston.1884:『Amended List of the Birds of Japan According to Geographical Distribution; with Notes Concerning Additions and Corrections Since January 1882』、London, Taylor and Francis
- T. W. Blakiston・H.J.Pryer. 1878:「Catalogue of the Birds of Japan」『Ibis』pp209-250
- T. W. Blakiston・H.J.Pryer.1880:「Catalogue of the Birds of Japan」『Trans. Asiatic Soc. of Japan』8(2)、pp172-241
- T. W. Blakiston・H.J.Pryer.1882:「Birds of Japan」『Trans. Asiatic Soc. of Japan』10(1)、pp84-186
- 千代肇.1979:「明治の函館博物館」、『日本歴史』378、pp90-97
- 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園編.2002:『北大植物園資料目録』2、T・W・ブラキストン採集鳥類標本目録
- Tetsuo Inukai.1932:「A Brief Biography of Captain Blakiston」『札幌博物学会報』XII、Pt.4、pp256-261
- 犬飼哲夫.1943:「北海道に於けるブラキストン氏とブラキストン線」『北の風土と動物』、北方文化出版社、pp209-231
- 犬飼哲夫.1981:「ブラキストン大尉」『採集と飼育』43(5)、pp278-281
- 犬飼哲夫.1988:「トーマス・ライト・ブラキストン」、木原均、篠遠吉人、磯野直秀監修『近代日本生物学者小伝』、平河出版社、pp64-68
- 磯野直秀.1992:「日本博物学史覚え書(Ⅰ)」『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』14、pp96-109
- 加藤克.2001:「北海道大学農学部博物館所蔵絵画資料の歴史的検討」『北海道大学農学部博物館の絵画－博物画・風景画・アイヌ絵・洋画－』北海道大学文学研究科平成12年度プロジェクト研究報告書、pp10-20
- 加藤克.2002:「史料紹介 札幌農学校所属博物館標本採集日記」(1)『北大植物園研究紀要』2号、pp69-84
- 加藤克.2003a:「ブラキストン標本と絵画資料」『北大植物園研究紀要』3号、pp1-24
- 加藤克.2003b:「史料紹介 札幌農学校所属博物館標本採集日記」(2)『北大植物園研究紀要』3号、pp63-80
- 加藤克.2004:「札幌農学校所属博物館のアイヌ民族資料」『北大植物園研究紀要』4号、pp1-54
- 加藤克・市川秀雄.2002:「北大植物園所蔵ブラキストン標本の受入過程とその現状」『北大植物園研究紀要』2号、pp1-24
- 加藤克・市川秀雄.2004:「北大植物園・博物館所蔵アメリカ自然史博物館鳥類標本について」『北大植物園研究紀要』4号、pp65-75
- 加藤克・市川秀雄.2005:「犬飼哲夫のブラキストン資料」『北大植物園研究紀要』5号、pp1-22
- 北島佐一郎.1985:「ブラキストンについて」『こくがん』5、pp10-22
- 国立科学博物館.1977:『国立科学博物館百年史』、第一法規出版社
- 近藤唯一訳.1879:トーマス・W・ブラキストン著『蝦夷地の中の日本』、八木書店
- 黒田長禮.1958:『日本鳥類目録』第4版、日本鳥学会
- 村田荘次郎.1900a:「北海道鳥類一班(一)」『動物学雑誌』12(142)、pp287-290
- 村田荘次郎.1900b:「北海道鳥類一班(二)」『動物学雑誌』12(144)、pp365-369
- 村田荘次郎.1901a:「北海道鳥類一班」『動物学雑誌』13(147)、pp19-23
- 村田荘次郎.1901b:「北海道鳥類一班」『動物学雑誌』13(153)、pp231-235
- 村田荘次郎.1902:「北海道鳥類一班(續き)」『動物学雑誌』14(169)、pp403-406
- 村田庄次郎編.1910:『札幌博物館案内』、維新堂

大蔵省編.1885:『開拓使事業報告』、大蔵省

佐々木利和.2001:「博物館図譜とその世界」、国立科学博物館編『日本の博物図譜』、東海大学出版会、pp49-51

関秀志.1975:「明治初期～中期における北海道の博物館—札幌を中心に」、『北海道開拓記念館研究年報』4号、pp47-63

関秀志.1991:「明治期における北海道の博物館(2)」、『北海道開拓記念館調査報告』30号、pp91-118

関秀志・中田幹雄・千代肇.1990:「明治期における北海道の博物館(1)」、『北海道開拓記念館調査報告』29号、pp113-139

椎名仙卓.1989:『明治博物館事始め』、思文閣出版

市立函館博物館.1979:『函館博物館 100年のあゆみ』、市立函館博物館

市立函館博物館.1991:『ブラキストンと函館』、ブラキストン没後 100年企画展展示資料目録、市立函館博物館

市立函館図書館.1935:『函館郷土史料目録: 函館開港記念回顧展覽會出陳』、市立函館博物館

L. Stejneger.1886a:「Review of Japanese Birds I」『Proc. U. S. Nat. Mus.』9、pp99-124

L. Stejneger.1886b:「Review of Japanese Birds II」『Proc. U. S. Nat. Mus.』9、pp374-394

L. Stejneger.1886c:「Review of Japanese Birds III」『Proc. U. S. Nat. Mus.』9、pp395-408

L. Stejneger.1886d:「On a Collection of Birds Made by Mr. M. Namiye, in the Liu Kiu Islands, Japan, with Descriptions of New Species」『Proc. U. S. Nat. Mus.』9、pp634-651

L. Stejneger.1887a:「Review of Japanese Birds IV」『Proc. U. S. Nat. Mus.』10、pp4-5

L. Stejneger.1887b:「Review of Japanese Birds V」『Proc. U. S. Nat. Mus.』10、pp271-319

L. Stejneger.1887c:「Further Contributions to the Avifauna of the Liu Kiu Islands, Japan, with Descriptions of New Species」『Proc. U. S. Nat. Mus.』10、pp391-415

L. Stejneger.1887d:「Review of Japanese Birds VI」『Proc. U. S. Nat. Mus.』10、pp416-429

L. Stejneger.1887e:「On a Collection of Birds Made by Mr. M. Namiye, in the Islands of Idzu, Japan」『Proc. U. S. Nat. Mus.』10、pp482-487

L. Stejneger.1887f:「Review of Japanese Birds VII」『Proc. U. S. Nat. Mus.』10、pp606-611

L. Stejneger.1887g:「Review of Japanese Birds VIII」『Proc. U. S. Nat. Mus.』10、pp425-432

L. Stejneger.1888:「Review of Japanese Birds IX」『Proc. U. S. Nat. Mus.』11、pp547-548

L. Stejneger.1892:「Captain Thomas Wright Blakiston」『Auk』9(1)、pp75-76

田島達也.2003:「ブラキストン標本の鳥類図について」『北大植物園研究紀要』3号、pp15-34

高倉新一郎編.1962:『エドウィン・ダン 日本における半世紀の回想』、エドウィン・ダン顕彰会

高倉新一郎・関秀志・笹木義友・門崎充昭.1886:「幕末維新期における欧米科学技術の摂取について—福士成豊を中心に—」『北海道開拓記念館研究年報』14、pp45-68

東京国立博物館.1973:『東京国立博物館百年史』、東京国立博物館

Yoshimaro Yamashina, Tetsuo Inukai and Buko Natori.1932:「A List of Birds' Skins by Captain BLAKISTON in the University Museum of Natural History of Sapporo with a Brief Account of His Life in Hokkaido」『札幌博物学会報』XII、Pt.4、pp215-261

彌永芳子.1979:「トーマス・W・ブラキストン伝」『蝦夷地の中の日本』、八木書店、pp445-617

¹ 正式名称は、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園。

² ブラキストン・ブライヤーによる『Birds of Japan』は刊行年次により名称が異なるが、本稿では煩雑を避けるため、すべて『BJ』と略記することとする。名称は参考文献を参照されたい。

³ 本稿が取り扱う時期の函館博物場は、時期・陳列施設の建設により名称が様々であるが、函館博物場に統一して表記することとする。

⁴ 本節は、とくに断らない限り、関ら(1990)を参考として記述している。

⁵ 函館支庁勸業係「従明治十一年一月至十二月 十二年マテ 函館博物場并公園地書」北海道立文書館所蔵簿書 2661。

- 6 以下寄贈の経緯について紹介するが、詳細については加藤・市川(2002)を参照されたい。
- 7 関ら(1990)、「函館仮博物館陳列品」一覧表、函館支庁勸業係「第五期報告書原稿」(北海道立文書館所蔵簿書 4015)に基づく。
- 8 関ら(1990)、「函館仮博物館陳列品」一覧表、『開拓使事業報告』明治 18 年、勸農・仮博物館の項に基づく。
- 9 函館支庁勸業係「明治十二年ヨリ十三年マデ 函館博物館書類」北海道立文書館所蔵簿書 4082。
- 10 函館支庁勸業係「願伺届録 明治十四年ヨリ十五年三月函館県エ引継迄ノ分属之」北海道立文書館所蔵簿書 4767。ブラキストン標本の札幌移管については、加藤・市川(2005)を参照されたい。
- 11 市立函館博物館所蔵「明治廿三年四月一日現在、博物館陳列品其他越品調書、函館博物館列品目録」では、1880 年から翌年にかけて収集された鳥類関係資料が 5 点存在していることがわかる。
- 12 市立函館図書館所蔵『BJ』1880(所蔵番号 0008581234006)末尾に添付されている書類。
- 13 市立函館博物館所蔵「明治廿三年四月一日現在、博物館陳列品其他越品調書、函館博物館列品目録」。
- 14 この数字は、犬飼哲夫が山階芳麿らと協力して目録を作成した時点での点数。旧稿で述べたように、この数字にはブラキストン標本以外のものが多数含まれており、信頼することはできない。
- 15 コクマルガラス、ブラキストンの目録番号 194。
- 16 シマフクロウ、ブラキストンの目録番号 302。
- 17 現在のスミソニアン研究所国立自然史博物館(National Museum of Natural History)。ブラキストンのノートの現状については現在問い合わせ中である。
- 18 ブラキストンまたはその協力者が採集した分。後述する教育博物館、国立博物館の情報は除く。
- 19 ブラキストンのノートに記載されたブラキストンの管理番号から、スタイネガーの報告に函館博物館所蔵という記述がなくとも、現在北大植物園博物館に所蔵されている標本との照合が可能であり、11 点の所蔵が確認される。これらを含めると、35 点が北大植物園博物館に所蔵されているべきであるが、後掲表にみるキバシリ標本に該当するものを見出すことが現時点でできないため、スタイネガーの報告に見る標本のうち、34 点が所蔵されていることになる。
- 20 この点については、ブラキストンが所有していた標本すべてを寄贈したという仮定に基づくものである。スタイネガーの報告に掲載されている標本の中には、ブラキストンがロンドンや広東で入手した標本も含まれており、ブラキストンにとって重要なものは手元に所持していた可能性もある。
- 21 明らかに誤って付け替えられた 2 件を除き、また紐のみ付属しているものも含む。なお、旧稿発表以降に新たに確認されたブラキストン標本 5 点の内、4 点に「ラベル 4」が付属しており、旧稿で発表した件数から増加している。
- 22 北大植物園博物館に所蔵されている標本管理カードの中に、犬飼・山階らの目録作成時に利用したと考えられるものがある。これらのカードの管理の方法は「ラベル 4」の番号を基準としている。カードに記載された番号が現在確認できないものの、他の標本情報から、1932 年ごろに「ラベル 4」が付属していたことを示唆するものが数点確認される。
- 23 前掲注(13)掲載「函館博物館列品目録」においても、魚類、哺乳類、植物などの標本の増加が顕著である。
- 24 函館支庁勸業係「明治十二年ヨリ十三年マデ 函館博物館書類」北海道立文書館所蔵簿書 4082。
- 25 ヤマグラ(標本番号 3670、3675)とともに 1891 年 11 月 2 日函館採集、ニュウナイズメ(標本番号 3402)、1891 年 11 月 10 日函館採集、ウズラ(標本番号 4191)、亀田郡亀田村採集。
- 26 函館支庁勸業係「明治十二年ヨリ十三年マデ 函館博物館書類」北海道立文書館所蔵簿書 4082。
- 27 なお、ここに現れる長崎護通については開拓使・函館県・北海道庁の職員録などからは確認することができないため、博物館の職員ではないと考えられる。
- 28 本節はとくに断らない限り、関(1975)、関ら(1990)を参考として記述している。
- 29 『開拓使事業報告』明治 18 年、勸農・仮博物館の項。
- 30 「履歴短冊、明治十年」北海道立文書館所蔵簿書 1959。
- 31 村田(1900a、1900b、1901a、1901b、1902)。
- 32 本節は、特に断らない限り、国立科学博物館(1977)を参照して記述している。
- 33 スタイネガーによればブラキストンのノートには情報が詳細に記載されており、ブラキストンが実際に標本調査を行っていたことは確認される。
- 34 波江元吉は、教育博物館勤務の後、東京大学動物学教室の助手となった人物で、ナミエグラなどにその名前を残している。
- 35 『函館毎日新聞』1911 年 8 月 8 日号に、ブラキストン没後二十年祭に出品された波江宛のブラキストン書簡(1882 年 3 月 27 日付)の写真が掲載されている。マイクロフィルムの写真からでは判然としないが、アジサシ属の鳥について連絡している。
- 36 本節の内容については、特に断らない限り『東京国立博物館百年史』を参考として記述している。
- 37 本節は、とくに断らない限り関(1991)を参考として記述している。
- 38 河野常吉『博物一式』(稿本、犬飼哲夫旧蔵)、現史料は未見、関(1991)による。
- 39 本節は、特に断らない限り関(1975、1991)を参考として記述している。
- 40 村田(1910)序文。
- 41 『開拓使事業報告』明治 18 年、勸農・仮博物館の項。
- 42 『開拓使事業報告』明治 18 年、勸農・仮博物館の項。
- 43 北海道事業管理局「博物館引渡目録」北海道立文書館所蔵簿書 10446。
- 44 民族資料が移管されていることについては、加藤(2004)を参照されたい。
- 45 北海道事業管理局札幌農業事務所「博物館農学校転轄書類」北海道立文書館所蔵簿書 8532。
- 46 札幌農学校簿書「局長上申本局稟議録」北海道大学附属図書館北方資料室所蔵 228。
- 47 ブラキストンによる「the White-eyed Duck, was obtained by collectors for the Sapporo Museum at a lake in the vicinity」という記述があり(Blakiston 1883、p27)札幌博物館には採集人がいたことが分かる。
- 48 典拠、酒井の名前は仮博物館時代にも確認することができるので、斉藤を除く 3 名については当初から勤務していた可能性もある。

⁴⁹ ただし、現在北大植物園博物館が所蔵する札幌農学校時代の図書には、欧米の鳥類学にかかわるテキスト・図鑑類が多数あり、閉鎖的な環境ではなかったことは間違いない。

⁵⁰ 1881年の標本については、ブラキストンの採集行記録がある(Blakiston 1882、1883)。

⁵¹ 函館支庁勸業係「従明治十一年一月至十二月 十二年マテ 函館博物場并公園地書」北海道立文書館所蔵簿書 2661。

⁵² 北海道事業管理局「博物場引渡目録」北海道立文書館所蔵簿書 10446 および北海道事業管理局札幌農業事務所「博物場農学校転轄書類」北海道立文書館所蔵簿書 8532。

⁵³ 北海道事業管理局「博物場引渡目録」北海道立文書館所蔵簿書 10446。

⁵⁴ 北海道事業管理局札幌農業事務所「博物場農学校転轄書類」北海道立文書館所蔵簿書 8532。

⁵⁵ 北大植物園博物館所蔵、加藤(2002、2003b)を参照されたい。

⁵⁶ 1901年に一度まとめられた後、1902年の情報が追加されているもの。村田が「北海道鳥類一斑」を執筆するために取りまとめたものと推察される。

⁵⁷ 北大植物園博物館所蔵犬飼哲夫旧蔵写真資料および北海道大学附属図書館北方資料室所蔵写真(請求番号:T(b) 56)。加藤・市川(2005)を参照されたい。

⁵⁸ もちろん、これは一面的な評価である。鳥類学の面ではブラキストンに肩を並べるようなことは困難であっただろうが、伊藤は後に水産学の面で多大な功績をあげているし、足立元太郎も札幌農学校の教員として活動している。当時の北海道においては最先端の体制であったことは評価すべきである。

⁵⁹ 前掲注 52。

⁶⁰ 教育博物館や函館博物場にブラキストンが多くの文献を寄贈していたように、札幌博物場にも文献を寄贈していたかもしれないが、現時点ではブラキストンゆかりの文献類を確認することができない。ブラキストンがこれらの文献を寄贈していなかったとするならば、やはり札幌博物場とブラキストンとの関係は、函館博物場と比べて希薄なものであったといわざるを得ない。